

1. 道徳通信「若竹」の発行に際して

21 世紀を生き生きと豊かに歩んで行くには、「生きる力」がとても大切だと言われていますが、この力を育むときに重要な柱となるのが『心の教育』だろうと思います。

しかし、狭い歩道を傘差して行き交うとき、互いに傘を傾け合うことをしなかったり、お年寄りや体の不自由な人が傍らで辛そうにしている、平気で漫画を読んでいる場面は、日常よく見かける光景です。

特に驚くのは、ある小学校で起きた次の出来事です。夏休みに 5 年生の飼育委員が餌をやりに来ると、動物たちは一匹残らず死んでいたというのです。ところが、小屋の中にはまだ新しい水と餌がきっちり与えられていました。前日の当番に尋ねたところ、「きのうも死んでた。でも、僕の役目は水と餌をやることだから、それだけはちゃんとして帰った。」と応えたのです。

このような現状は、「価値観の多様化」ではなく、まさに「価値観の混乱」と言うべきものです。こうした混乱の危機が間近に迫りつつあるという共通認識のもと、私たちは、学校教育や家庭教育、あるいは地域・社会教育の様々な場面で、子どもの心田を豊かに耕す必要があるでしょう。

そこで、子どもの「生きる力の芽」がしっかりと育まれるよう、そして、子どもたちが未来に向けて若竹のように伸びていくことを願いつつ、この道徳通信を発行することにしました。道徳通信「若竹」では、道徳の授業、道徳教育に関連した体験活動の様子、日々の印象的な生徒の言動、物事の見つめる際の一視点等について掲載してまいりますので、よろしくお願い致します。

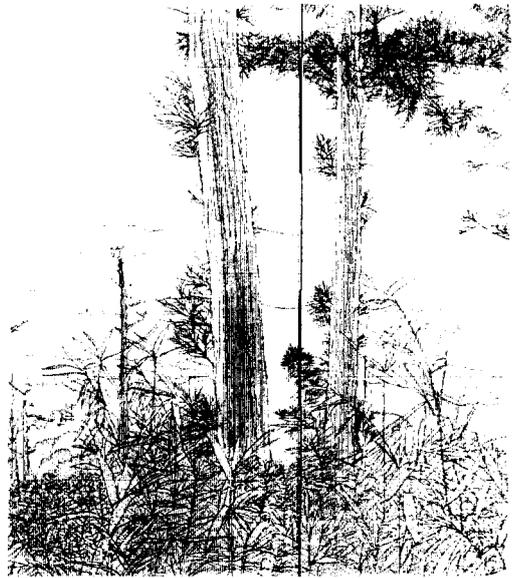
2. 目に見えないもの

瀬戸内の青い海や緑の島々の織りなす豊かな自然の中で少年期を過ごした平山郁夫氏は、数々の作品を発表しています。描かれた風景の中に吸い込まれて行きそうな“柔らかな風合い”と“清々しさ溢れる透明感”が私たちの心を打ちます。そして、これら本画の命の源として、何十枚にも及ぶ「下図（下絵）」の存在があるわけです。例えば、次は『八雲立つ 出雲路古代幻想』の本画とその下図の一部です。この下図は大下図と呼ばれるものですが、すぐにも色が塗れるような精密で決定的な描写を行っていることが分かります。

本画では塗り込められてしまっていて見えない所まで、細かな線で繊細にと描き込まれていることに驚かざるを得ません。



有名な青森のねぶた祭りでは、半年がかりで出来上がった大型のねぶたが市内を練り歩きます。この雄大かつ美しいねぶたは、見る人の胸に深く刻み込まれるそうですが、それほどまでに印象的なねぶたの“躍動感”は、一体どこから生まれてくるのでしょうか。その秘密を、数少ない専門ねぶた師の福井祥司氏が明かしています。すなわち、「ねぶたは構図と骨組みが基本です。こうした目に見えない所を丁寧にやらないと、紙が綺麗に貼れないし、仕上がりも見栄えがしません。」と。



北海道八雲町の熊の木彫り師 上村信光氏は、見る人が微笑ましく思えるように、魚をくわえていない自然な表情の熊を彫っています。顔・耳・口などを 30 本の彫刻刀を使い分けて掘り出しますし、毛彫りや毛立てでは 16 種類の彫り方を駆使して、1 本 1 本 実に細やかに彫っていきます。完成した熊には温かみがあり、今にも動き出しそうです。この木彫りの熊の瑞々しいまでの“生命感”を支えているものは一体何でしょうか。氏は、原木を大胆に彫っていく「まさかり彫り」や「粗彫り」の段階から「顔を曲げると筋肉はどう動くのか。骨はどういう形になり、どこが出っ張るのか。内側も見据えて彫っていくことが重要である。」とし、木彫り熊の生命線をこのような驚くべき部分に見出しています。まるで、針金で作った骨格に肉付けしていく粘土細工のようではありませんか。

上述の 3 氏に共通するのは、目に見えない部分に光を当ててそれを重視し、それを基壇に新たなものを豊かに創造しているという点であります。サン・テグジュペリの『星の王子さま』にいう「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ。」の世界は、何も特別な場面にだけ当てはまるものではなく、案外、私たちの足元から全方位的な広がりを見せているのかも知れませんね。

3. 道徳授業『勇ましい友』

(1) 物語のあらすじ

浦川君は、年中、山口とその仲間からいいオモチャにされて、何かにつけ、からかわれています。彼は貧しい豆腐屋の息子であり、弁当のおかずは決まって煮てないアブラゲでした。そのため、そばへ寄るといつもアブラゲの臭いがしています。果たして山口たちは、浦川君のあずかり知らぬところで「アブラゲ」というあだ名を付けるのでした。

そんなある日、クラス会が開かれることになり、その中の一演目として「演説」が位置づけられてたのです。誰に出演させるかを投票により決めていく場面になると、“アブラゲに演説させろ”と書かれた小さな紙「電信」が回ってきました。この時、

担任の先生は職員室に戻っていたため、「電信」は大っぴらに渡されて行きます。

しばらくすると、それは浦川君のところまでやって来ました。しかし、訳が分からず、ちょっと小首を傾げるだけでありました。すると、その隣の席にいた山口は後ろを向き、仲間の方を見ながら舌を出し、顔をしかめて見せるのです。

「電信」が回り回って山口のところに来ると、さも意外そうな様子をわざとして、それを読み上げ、「アブラゲって誰のことだい。」というのです。あっち、こっちからクスクスという笑い声が起こります。山口は得意でした。

「だれのことかなあ。」と言って、浦川君の方へ向きなおし、「ねえ、浦川。君、知っているかい。」と尋ねました。浦川君は、明らかに狼狽しました。めんくらった顔を山口の方へ向けて、恥ずかしそうに頭を左右に振りました。山口の仲間は、ドッと笑います。つられて、他の者も声をあげて笑いました。

それを聞いた瞬間、浦川君にはすべてが分かったのでしょうか。

—うちの商売、自分の弁当！ そうだ、アブラゲとは自分のことなんだ！—
浦川君は、みるみる真っ赤な顔になりました。

その時です。ガタンと音がしたと思ったら、北見君が立ち上がっていました。「山口！ 卑怯だぞ。」北見君は、憤慨に堪えない様子で叫びました。「弱い者いじめなんかよせ！」

山口は横目で北見君の方を見て、下唇を突き出し、フフンと笑って見せました。北見君は、もう我慢できないという様子で、自分の席を離れると、ツカツカと山口のところにやって来ました。

「アブラゲなんて、きさまが言い出したんじゃないか。ちゃんと知ってるぞ。」「へえだ！ こっちは知らないや。」「じゃ、なぜ、さっき舌を出したんだい。」「余計なお世話だい。」そう答えたか答えないうちに、ピシャリと、北見君の平手が山口の頬に飛びました。

そして、この後、山口も北見君の顔にツバを吐きかけたことで、北見君は山口の洋服の胸ぐらを捕まえて、上下にこづくこととなります。

(2) 印象的な授業場面

① 真の勇氣

1年生の授業の中では、本当の勇氣とは「他人を助けるために、行動すること」「正しいことを堂々で行うこと」「思いやりや優しさを伝えること」「自分が損してでも、行動に出ること」等の意見が出ました。また3年生では、「山口のような人を馬鹿にするような行為は、いくら珍しくても勇氣があるとは言わない。弱い立場の人を助けようとする行為には、勇氣があると言える。勇氣とは、悪いことは悪いとはっきり言えることだ。」といった見方が披露されました。

② 笑いの“質”

さらに3年生では、「笑い」の質について考えたところ、「“良い笑い”とは、幸せで心から楽しいと思った時に自然に出る笑い（皆が嬉しく思う笑い）であり、“悪

い笑い”とは、人を馬鹿にしたり、からかったり、人を傷つけたりする笑い（誰かが嫌な思いをする笑い）である。」との的を射た発言が見られました。

(3) 生徒の感想

2年生の北見君に対する対照的な感想を紹介します。

A：「暴力では解決することは出来ないと思うので、出来れば言葉で解決したいと思います。」

B：「山口は聞きそうにないから、暴力は仕方ないと思った。」

このあたりの個々の意見の違いというのは、大変興味深く感じます。私たち大人でも、意見の分かれるところではないでしょうか。しかし、「可哀想と思っているだけだったら、浦川君の力にはなれない。そんな中で行動に出たというのは、すごく勇気のあることだと思う。」という2年生の感想が象徴するように、何らかの形で行動に移すことの大切さと、それには一定の勇気を持ち合わせている必要があることを深く考える授業ではあったようです。

4. おわりに ～五中道徳部より～

今回ご紹介しました授業『勇ましい友』では、事前に各学年の道徳担当者が、物語の押さえ所を検討し合ってから実施しました。

例えば、勇気の本質に迫るために「山口の行為も北見君の行為も、“普通の人には真似の出来ない行為”という点では共通していますが、何が決定的に違うのでしょうか。」を考えたり、正義や思いやりに対する見方を深めるために「笑いの“質”」について考えたりしました。また、北見君の一連の行為に対する評価も、人によってある程度の揺れが見られるだろうということも確認し合いました。

このような「事前の検討」と「生徒の豊かな感性」とが相俟って、上述のような鋭くも瑞々しい意見・感想が溢れ出たのだらうと考えます。今後とも、生徒が額に汗して自己の心田を耕し、夢と希望の種を丁寧に蒔いていくことができるよう、学校全体としても全力で支援してまいりたいと存じますので、よろしくお願い致します。